

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	久山 雄甫
論文題目	ゲーテにおけるガイスト概念 —— 永遠、時間、メタモルフォーゼ		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ゲーテにおける「ガイスト (Geist)」概念を論じたものである。古代以来の西欧思想史において複雑な背景を持つこの概念はドイツ文学・思想史においても重要な意味を担い、ゲーテもこの概念を多用しているが、従来のゲーテ研究が包括的に取りあげることがなかった。本論文はその概念史とゲーテの受容をpushしえつつ、初期から最晩年にいたるまでのゲーテのさまざまな種類のテキストにおけるガイスト概念を、先行研究を検討しながら読み解いて明らかにし、作品の新たな解釈をも提示するものである。</p> <p>まず「はじめに」で、ドイツ18世紀末の辞書の記述から、古代ギリシア語の「プネウマ」からラテン語の「スピリトゥス」を経て「ガイスト」に至る系譜に着目し、古代ギリシア哲学、聖書のユダヤ・キリスト教、さらにグノーシス主義の人間論等におけるこの概念を整理する。</p> <p>第一章「永遠なるガイスト——若きゲーテの靈感論」では、第一節「プネウマと人間の言語」で、論文『聖書の二つの問い』においてガイストが、神 (永遠) と人間 (時間性) とを結ぶメデイウムとして〈永遠と時間のあいだ〉に位置づけられているとする。第二節「大地ガイストと時間性」は、『ファウスト初期稿』で「大地のガイスト」が共時性と通時性の同居という矛盾を表象し、後年のゲーテの根源イメージおよびメタモルフォーゼ論を先取りしていると指摘する。</p> <p>第二章「神話の「現在」——方法としての発生論」は、第一節「地学と自然史」で論文『花崗岩II』を扱い、ここで描かれる原初の生命原理としてのガイスト＝プネウマを吟味する。さらに第二節「現在という概念——ヘレナとファウスト」では、ゲーテは「現在」を象徴的で神的な時空間と捉え、『ファウスト第二部』のヘレナ (古代ギリシア神話を出自とする「ガイスト」) がこうした現在概念の理想の極致であるのに対し、ファウストは「瞬間」に囚われており、両者の関係の破綻は、近代人が「現在」の深化を通じてガイストに参入する困難を語るものだとする。</p> <p>第三章「新プラトン主義の脱ヒエラルキー化」の第一節「「プロティノス批判」と色彩論」は、ゲーテのプロティノス受容の特徴として、永遠世界と時間世界、そしてガイストの脱ヒエラルキー化が認められることを明らかにする。ゲーテはプロティノスをフィチーノによるラテン語訳で読んでいたが、それを受けて第二節「プロティノス、フィチーノ、ゲーテ」では、ゲーテによるプロティノスの換骨奪胎ともいえる受容について三者の著書の記述を二点について比較検討し、プロティノスとゲーテの中間にフィチーノが位置づけられるとしている。</p> <p>第四章「メタモルフォーゼと環世界——ガイストの脱中心化」の第一節「ナマケモノの形態学」では、書評論文『オオナマケモノ』を考察し、環世界に合わせた自己変容能力が「ガイスト」とされ、ナマケモノは海生から陸生に変化してなお環世界に適応できない「無ガイスト (Ungeist)」とされていることを指摘する。第二節「ホムンクルスと海」では、『ファウスト第二部』のホムンクルス劇を、環世界に焦点を移行させたゲーテ形態学が文学化されたものとして解読する。ホムンクルスはガイストのみの存在であるが、肉体を得るために海に身を投げる。作品中ではその後のストーリー展開はなく、始原の海という「場所」としての余白のみが残され、ここにガイストの脱中心化が認められるとする。</p>			

第五章「エンテレケイアと救済の果て」では、ここまで確認してきたものとは異なったガイスト概念も認められることを、ゲーテのモナド観（第一節「モナドの不滅」）、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のマカーリエ（第二節「マカーリエの命運」）、そして『ファウスト第二部』終幕部分の改稿による変遷（第三節「ファウストの救済」）で明らかにする。ゲーテは生命体が肉体的に死んでも「偉大なエンテレケイア」は活動を続けると考えていた。ただし先行研究でプロティノスとしばしば関係づけられ、「完全性の具現化」と解釈されてきたマカーリエが示すのは、実は精神と肉体の不調和であり、過度に「ガイスト的」な存在のあやうさであると申請者は解釈する。対照的にファウストは、「ガイスト」が物質性を脱ぎ去るといふ自己のメタモルフォーゼを果たす。しかしそのあまりにあっけない終わり方は、読者に大きな余白を残す。ゲーテがガイストの性格を本質的な規定をしないことによって語ろうとするのは、いまだ／もはや人間の「語り」がなくなってしまう「場所」、ガイストが概念としての表出をやめてしまいつつ、豊かな無限のメタモルフォーゼの可能性が湧出し続ける、潜在的な生命をやどす〈余白〉の場所である。

「おわりに——冗談と余白」は、以上を受けて、「とても真摯な冗談」というゲーテの語とも絡ませ、テキストが幕を閉じた後に残される余白を、ゲーテにおけるガイスト概念の運動の極致であると指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ゲーテにおける「ガイスト (Geist)」概念を論じたものである。この概念はドイツ文学・思想史において重要な意味を担い、ゲーテもこの概念を多用しているが、従来のゲーテ研究が包括的に取りあげることにはなかった。またこの概念自体、古代以来の西欧思想史の複雑な背景を持っている。本論文はその概念史とゲーテの受容をpushさえつつ、初期から最晩年にいたるまでのゲーテのさまざまな種類のテキストにおけるガイスト概念を、先行研究を緻密に検討しながら丹念に読み解いて明らかにし、作品の新たな解釈をも提示する、非常に優れたものである。

まず「はじめに」で、古代ギリシア哲学、聖書のユダヤ・キリスト教、さらにグノーシス主義の人間論等におけるこの概念を整理し、本論を展開する基盤とする。

第一章では、「若きゲーテ」と呼ばれる初期のテキストを扱い、神学論文『聖書の二つの問い』においてはガイストが、神と人間を結ぶメディウムとして〈永遠と時間のあいだ〉に位置づけられていることを明らかにし、さらに『ファウスト初期稿』の「大地のガイスト」が共時性と通時性の同居という矛盾を表象し、後年のゲーテの根源イメージおよびメタモルフォーゼ論を先取りしていると指摘する。

第二章ではまず地学論文『花崗岩Ⅱ』を考察し、ここで描かれる原初の生命原理としてのガイスト＝プネウマを吟味したうえで、「現在」を象徴的で神的な時空間と捉えたゲーテが、『ファウスト第二部』のヘレナ（古代ギリシア神話を出自とする「ガイスト」）に現在概念の理想を託したのに対し、ファウストは「瞬間」に囚われた存在であると分析し、両者の関係の破綻は、近代人が「現在」の深化を通じてガイストに参入する困難によるという解釈を提示した。

ゲーテの新プラトン主義受容に注目する第三章では、まず「プロティノス批判」と色彩論に、永遠世界と時間世界、そしてガイストの脱ヒエラルキー化が認められることが明らかにされた。ゲーテはプロティノス著『エネアデス』のフィチーノによるラテン語訳に感銘を受け、大きな影響を受けたとされる。本章ではさらにフィチーノを介してゲーテのプロティノス受容を検討するという斬新な視点により、ゲーテのガイスト概念論に、新しい次元が加えられた。

形態学を扱う第四章では、『オオナマケモノ』では環世界に合わせた自己変容能力がガイストとされていることを指摘し、『ファウスト第二部』のホムンクルス劇を、ゲーテ形態学が文学化されたものとして解読する。さらに、ホムンクルスが海に身を投げた後のストーリー展開がないことに、始原の海という「場所」としての余白のみが残される点に注目したのは画期的である。

ゲーテにおけるさらに異なったガイスト概念を考察する第五章では、とりわけ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のマカーリエ像を先行研究の思い込みから解放して新たな解釈を提示した。『ファウスト第二部』の終幕部についても、改稿による内容的変遷と最終稿の終わり方に注目し、余白という捉え方をさらに深めた。

そして最後に、「とても真摯な冗談」というゲーテの語とも絡ませて、テキストが幕を閉じた後に残される余白をゲーテのガイスト概念の運動の極致であると論ずる論も斬新である。

以上のように本論文は、「ガイスト」の複雑な概念史の軌跡をゲーテの受容に

向けて辿ったうえで、ゲーテの数多くのテキストを丁寧に分析し、それぞれにどのような「ガイスト」概念が伺えるかを明らかにした。またゲーテ形態学においては想像力を駆使した「詩的」な対象叙述が許されていることに着目してそれが実際に実行されていることを示し、個々のテキスト内の分析・解釈に終わるのではなく、ゲーテの科学的論文と文学作品とのいわば相互嵌入関係を見事に描き出し、秀逸である。さらに、期待される「その後」が作品内では展開されずにおかれている点を、「余白」と捉えることで、作品を超え出たダイナミズムを作品構造に認めて析出した点も興味深い。

たしかに、「女性原理」に触れながらジェンダー論的視点に欠け、またフィチーノ論も通例の読みを超えることはないが、フィチーノを介在させることでゲーテのプロティノス受容理解に新たな局面を切り拓いている。加えてゲーテのテキストのみならず、扱うテキストすべてについて先行研究を徹底的に検討したうえで、独自の解釈を提示し、はじめてゲーテのガイスト概念の全体像を示しえたことは、非常に高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年12月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降